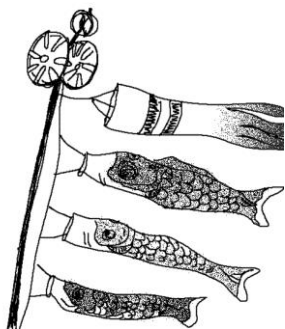


五月のテーマ
伝える

みんなに 知らせよ う！

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれを掲載します。



え・古屋智子

「人」を改めさせよう、変えようとする前に、まず自ら改め、

自分が変ればよい」という教えがある。これはたいへんよい言葉だと思う。親子や夫婦の間でも、職場の人間関係や交友などにおいても、ひじょうに実践効果のいちじるしい内容をもっている。

子どもが反抗している。お前がいけないのだと、頭からどなりつける。すると、「なんだ。お父さんは勝手なことばかりおしつけて……お父さんが悪いんだ」と子どもはなおも抵抗する。子どもがいうことをきかないとき、子どもだけを改めさせようとしないで、まず親自身のいいかた、態度、心がまえなどを改めてかかることが先なのだ。

結婚して二年にしかならない若妻が、夫と離婚したいという。なぜかときくと、「夫はいちども、ごくろうさんとか、ありがととか、愛情のある言葉をかけたことがない。わたしが、つくろいものをしてあげても何もいわないし、まごころこめて料理をつくっても、味がどうとか文句はいっても、ほめてくれたためしが

ない。こんな男とは、とても生活できません」ということだった。

それで、「あなたの気持ちはいちおうわかるけれど、ではあなたのほうで、ご主人に感謝の気持ちをあらわしたり、ほめたりしたことがありませんか」ときいてみると、「あんな欠点だらけの男はほめようがありませんよ。だから、ごくろうでしたなどと、口がまがつてもいえませんよ」という返事であった。

これでは、どうにもなるまい。相手を変えさせようとするには、まず自分が変わる、自分が変わらないで、夫でも妻でも、わが子でも、友人同僚、その他相手が変わるわけがない。

これは日常の些細なことからの間にも、たいせつな心がまえとなるべきなのだが、現代はその反対で、何かといえはすぐ、「お前がわるいのだ」「まずあんた達が変われ」といったぐあいに、自分のことは後まわしにしておいて、相手を責めるような態度がいたるところに見られるようである。これではどこまでいっても家庭も職場もよくなりはない。争いは絶えず、悪くなる一方である。

だから「相手を変えるよりまず自分」といった内容のことは、日常生活の心得として、大いに人々に知らされ、ひろめられるべきことがらだと思う。それを人々に知らせることによって、自分自身の実行力もついてくる。いつか人は、そのよいことを忘れて、まず相手を責めようとする。しかし人にすすめていると、相手を改めさせようとする気もちが出てきたとき、ハツと気づくようになるものだ。

自分だけわかっていて、ひとりで行うことができるというのは、よほど偉い人だ。そんな偉い人は、ほとんど居るまい。私も凡俗の人間は、よいことは人にすすめ、それによって自分自身が教えられ、導かれて、よいことを実行できるようになる。

人間には誰にもあやまちがあるであらう。そのあやまちにたいして、すぐに反省し、あらためることができぬのも、そのよいことを人に知らせ、すすめていけばこそであらう。人につたえるとは、同時に自分の自覚を深めることになるのである。

（月刊『新世』一九六九年七月号より）